

# 高安亀次郎『世界列国の行く末』について

伊 東 孝

## I 架空戦記『世界列国の行く末』

### 1 近代黎明期の架空戦記

近代の架空戦記、とりわけ欧米列強の脅威に日本がいかに対抗していくかをめぐる虚構の物語の系譜において、高安亀次郎『世界列国の行く末』（金松堂・明治二〇（1887）年六月）は注目すべき位置にある。

高安の『世界列国の行く末』は、近代文学黎明期において最も早く登場した未来戦記の事例としてある。欧米列強との架空戦争のイメージは、幕末に漢文小説の形式で書かれた巖垣月洲『西征快心篇』（安政四（1857）年）以来、未来戦記として多くの作品が生み出されてきた。この『西征快心篇』に続く架空戦記の系譜に、この『世界列国の行く末』がある。もちろん『世界列国の行く末』は、日清戦争以後顕著とな

る対ロシア架空戦争小説としても最初期の例にあたる。<sup>〔註1〕</sup>また、この作品は一九〇三年に中国で翻訳・公刊化されている。<sup>〔註2〕</sup>

### 2 『世界列国の行く末』の梗概

ここでまず、『世界列国の行く末』の梗概を紹介したい。その作品世界は、西暦二五四三年、つまり二十六世紀の世界に設定されている。

作品世界は、波羅的（バルチック）専制国と亞米利加（アメリカ）合衆共和国の二大国家が拮抗する国際状況下にある。波羅的専制国（以下、バルチック専制国と表記）とは現実世界におけるロシアの後身であり、亞米利加合衆共和国（以下、アメリカ共和国）とは前世紀のアメリカ合衆国である。物語は、この二大国家に挟まれた東洋の小国、参島「サンアイランド」が、バルチック専制国による侵略の危機が迫ったことから発動する。このサンアイランド（以下、参国）とは、未

来の日本である。この参国は、朝国「コーリー」(韓国)を自領とし、琉球・台湾も属地としている。参国はアメリカ共和国の文化を積極的に輸入し、バルチック専制国の影響力が支配的な極東地域において、独自の地位を維持している。

また、参国のほかに独立を維持しているのは、アイルランド独立国(アイルランド)、ノルマンジー自主共和国(フランス)、ジャーマン民主共和国(ドイツ)、支国「チャイナ」(清国)がある。しかし二大国以外の国力は総じて微弱傾向にある。

作品世界の世界地図では、アメリカ共和国が南北アメリカ大陸を自領としている。一方のバルチック専制国は、アフリカ、オーストラリア大陸を自らの版図に加え、ユーラシアの殆どを実効支配している。小アジアやインドは言うに及ばず、イギリス本島やヨーロッパ、かつての清国の大部分はバルチック専制国の領有となっている。

アイルランド、ノルマンジー、ジャーマンの各国は反バルチック親アメリカの姿勢を取っている。支国政府はバルチックに隷属し、わずかな支配圏を維持している。その支国の宰相らが参国領土の獲得を目論み、バルチック専制国に対参国開戦を策動する。

朝鮮半島の参国統治領がバルチック・支国同盟軍に攻撃を受け、参国本土はバルチック海軍によって海上封鎖される。半島に駐留していた参国軍守備隊は兵站を遮断され孤立、剩

えバルチック陸戦部隊による参国本土への上陸、占領という事態に至る。

バルチック専制国の軍事的脅威に対し、参国がいかに抵抗し、国際状況を転換していくか。これが『世界列国の行く末』の物語である。参国の危機をめぐる物語は、参国総理大臣オータケ、参国国会議長トリヤマ、参国陸軍大将ヨシノ、「希代の烈女」タチバナらの活躍を中心に語られていく。

烈女タチバナは、アメリカ共和国に向かい、演説してアメリカ共和国の世論に参国救援を訴える。諸国の民主化運動家が助力するも、バルチック専制国による対アメリカ圧力や在アメリカ支国大使による策動などがあり、タチバナの活動は難航する。参国ウマセキ要塞陥落の報が伝えられるも、アメリカ共和国大統領は対バルチック開戦に踏み切れない。遂にタチバナは、義勇兵とともにアメリカ共和国が提供した軍艦で、バルチック国首都突入を目指し出航する。

バルチック国皇帝は、参国攻略を親征するためシャンハイに前進。夜間に突如発生した市街大火災のため、集結していたバルチック国軍部隊に甚大な被害が生じる。この火災はトリヤマらによる攪乱であった。退避した皇帝は、ヨシノ旗下の参国軍部隊の急襲に遭遇、北京に逃走。そこでタチバナらのバルチック国首都制圧と新たな民主政権樹立の報道に接する。その後、皇帝は自国に向かい民主政権側に拘束される。

列国会議が招集され、前皇帝ゾドフレンらの弾劾裁判が催

される。また、元バルチック国領の参国などへの分譲、および国際秩序の維持を目的とする世界大会議院の設立が決議される。

以上が『世界列国の行く末』で語られるところの、二十世紀の戦争の帰結である。

### 3 作者高安亀次郎

次に、著者である高安亀次郎、筆名東洋奇人・松の舎主人について触れよう。この高安亀次郎については、現在のところ伝記的情報はほとんど未詳である。

高安の著作である『憲法と国民』（東洋社・明治二一（1889）年二月）の記述から推測すると、『世界列国の行く末』公刊時において高安は二〇歳前後と見られる。また、投獄された経験もあったらしい。<sup>〔註3〕</sup> また、高安は自由党の関係者であったともいわれている。<sup>〔註4〕</sup>

さて、この高安亀次郎による『世界列国の行く末』は、時代に埋没してしまった作品である。しかしながら未来架空戦記の系譜において、この作品は現在確認しうる最初期の近代未来戦記である。近年では、「明治から昭和の太平洋戦争敗戦までに描かれた、おびただしい数の戦記SF」において「アメリカおよび世界各国が日本の味方につくという発想は珍しく、「日露戦争を予測し、アメリカが参戦する」というイマジネーション」や「日本のジャンヌダルクともいべき

少女が登場するところなど、きわめて斬新な発想」が認められ「この時代にあつては異色の作品」である、との横田順彌氏の指摘がある。<sup>〔註5〕</sup> しかしながらこの作品はこれまで本格的に検討されてこなかった。

改めてこの高安亀次郎の『世界列国の行く末』に光を当て、近代黎明期における時代へのリアクションとして読み直してみたい。

## II 先行評価について

### 1 明治二〇年の時代状況

『世界列国の行く末』の刊行は明治二〇（1887）年六月である。当時、世論は国権拡張論の傾向が強まっていた時期である。明治十五（1882）年七月の壬午事変を境として、世論が民権論から国権論へと移っていく。朝鮮半島の情勢の緊迫にともない、日本政府は清国を仮想敵国とし、陸海軍の拡張を策定する。この政府の対清方針と軍備拡張路線について、大多数の世論はこれを支持した。

壬午事変は、清国の宗主権の回復と日本の政治的後退をもつて收拾となる。その後、清仏戦争（1884～85）を経て明治十七（1884）年の甲申事変へと至るが、日本はさらに後退を余儀なくされ、清国は韓国内政への干渉を一層深めることになる。一時停滞していたロシアの南下も、西シベリア鉄道

建設の進捗などが活発となる。清国の干渉を嫌う韓国政府はロシアとの連携を深め、有事の際にはロシアに保護を求める秘密協定を締結する動きにまで発展する。

清露両国の韓国介入は、韓国を国防の生命線とする日本の指導者層の危機感を高めることになる。しかしながら、この時期の日本の国政担当者にとって、国力・軍事力の観点から、ロシアや清国は未だ対等に戦える相手としては認識されていなかった。

明治十七（1884）年の甲申事変の事後処理にあたって、外務卿井上馨は平和的解決に向け清国と交渉を開始、漢城条約の調印をみる。しかし世論は軟弱外交と非難した。続いて伊藤博文が軍部強行派を抑え、特命全権大使として天津に赴き、明治十八（1885）年四月に天津条約を締結する。これにより清国との対決をとりあえず回避した。一方で、欧米列強の朝鮮や清国への進出に伴う抗争に割って入り、それで日本国益や安全を維持しようとする論調が在野に熱を帯びていた。

『世界列国の行く末』公刊当時は、朝鮮半島での緊張が高まり、清国・ロシアの軍事的脅威が切迫したものととして理解される状況であった。一方で、日本国内の自由民権運動は沈滞していた時期でもある。

明治十四年（1881）の政変以後、明治十七年の自由党解党を経た自由民権運動の敗北は、その参加者らに少なからず

の挫折感を与えていた。<sup>〔註6〕</sup> また一方で、明治十八（1885）年十一月に発覚した大阪事件など、自由民権運動の担い手たちの国権論的傾向が顕在化する事態も認められた。三大事件建白運動や大同団結運動といった停滞していた民権運動が一時再燃するのは、『世界列国の行く末』公刊より後の、明治二〇年七月の農務省大臣で陸軍退役中將、そして自ら「日本主義」を標榜していた谷干城の辞職を受けてからである。

既に、政府の条約改正案に対し、世論は激しく反対していた。結局、井上は諸外国に改正交渉の延期を通告したが、谷の辞職は世論を一層激化させることになった。いずれにしろ、日本主義者・谷干城の政府案に対する意見書やその行動が、かつての自由民権運動の参加者の情念を、束の間の再燃へと導いたのである。

## 2 国権小説

一般的な文学史において『世界列国の行く末』は、いわゆる国権小説の範疇に分類される。国権小説とは「国権伸張の意識をもち込むことを理想とした小説」<sup>〔註7〕</sup>と定義される。一八八〇年代後半から九〇年代にかけて、自由民権運動の停滞化と国権拡張論・国粹保存主義思潮の展開と時を同じくして、『佳人之奇遇』など国権小説が多く発表された。

国権小説があつかう国権の主題とは、条約改正・領土拡大・日系国家建設・商業圏確立・アジア支援などにまとめられる。

西田谷洋氏の言及によれば、北村三郎『新帝国策』（一八八七、五）や須藤南翠『遠征奇勲 曦の旗風』（一八八七、七、九（二五））と共に、『世界列国の行く末』は領土拡大をその主題としているとされる。なお、国権の主題としての条約改正は対外独立・国権回復に、領土拡大・日系国家建設・商業圏確立・アジア支援は対外進出・国権伸張に再整理される<sup>註8）</sup>という。

例えば、須藤南翠『遠征奇勲 曦の旗風』のストーリーとは、日本の憂国の志士が政府の援助で新領土開拓のため南洋に赴き、オランダ領バタビア政府軍と戦い、これを倒して日本領土とする、というものである。この『遠征奇勲 曦の旗風』は、南進論を反映した作品の嚆矢とされる<sup>註9）</sup>。当時の日本における対外膨張論・海外発展論には、中国大陸に進出せんとする北進論と、東南アジア、南洋諸島への進出を目指す南進論があった。ロシア・清国と戦って勝利し、戦後処理で大陸に領土を獲得するというプロットだけに注目すれば、『世界列国の行く末』はそうした北進論を反映させたものかに見えるてしまう。

### 3 同時代評など

ここで同時代評を見ておこう。『世界列国の行く末』は当時、徳富蘇峰の『国民之友』第八号（明治二〇（1887）年九月）で酷評されている。その第八号での「小説及び雑記」

での評価は次のようにまとめられる。

・「近刊の小説」には「最頁目を以て讀むも更に感服する所を見出」すことはなく、この『世界列国の行く末』も同様である。

・六百年後の未来を舞台としながらも状況は今日と変わらず、主たる登場人物のタチバナも魅力に乏しい。

・「定めて巧妙なる意匠の人を驚かすものあらんと思」ったが、期待外れであった。

・『世界列国の行く末』の著者が作品に込めた意図とは、その自序にある「我東洋ノ一孤島ヲ率キテ黯雲激波ノ間ヲ衝冒シ一鼓シテ東洋ノ覇國トナリ再鼓シテ世界列國ノ盟主タラシメンコトヲ希望ス」であろう。しかし本書には、これを実現させるための「奇策」が果たして提示されていただろうか。

この評者の『世界列国の行く末』への批判とは、おそらくは政治小説というジャンルを否定する立場からであり、その視座からのキャラクター造形とプロットに対するものである。つまるところこの評者は、朝鮮半島をめぐる参国（日本）とバルチック専制国（ロシア）・支国（清国）との間に戦争が起き、そして類型的な登場人物たちの活躍で勝利を得るというプロットが、単に当時の国権論や対外膨張論にみる主張

や期待をなぞるだけだと評しているのである。確かに「我東洋ノ一孤島ヲ率キテ……世界列国ノ盟主タラシメンコトヲ希望ス」の一節だけみれば、対外膨張論の論旨と大差ないだろう。ゆえに、先の評者の言は当然性を持つかに見える。

次に、高安亀次郎の別の著作『政海情波 寝やの月』（吟松堂・明治二〇（1887）年十一月）（以下、『寝やの月』と表記）について見ておきたい。高安はそこで、セルフパロディ的に『世界列国の行く末』について言及している。それはまた、『世界列国の行く末』が、明治二〇年当時において、一般的に「侵略主義」と見なされたことを示唆している。

『寝やの月』の作品世界は帝国憲法制定後の、公刊時点では近未来の日本に設定されている。物語は「東洋無双の佳人扶桑随一の美人」武田芳子を中心に語られていく。梗概は次のようなものである。

近未来、朝鮮半島で清・ロシア・フランス・ドイツの軍事衝突の危機が高まる。その時ドイツが戦略拠点として対馬の租借を日本に要求してきた。国内世論が好戦論に傾く中、局外中立を主張する政権与党である改進黨と、この機に乗じて朝鮮半島への軍事介入を目論む保守党と軍部主流派の対立が激化する。

芳子は、連合政権の総理大臣で改進黨の党首でもある武田義緒の妻である。保守党勢力は武田総理を失脚させるため、芳子のスキャンダルを仕立てようとするが、彼女自身によっ

て阻まれる。そして芳子は、夫が保守党勢力の姦計に陥る寸前に身を挺してこれを回避するのである。

さて、作品中、平和主義・局外中立派である武田芳子が『世界列国の行く末』について言及する場面がある。

芳子は「多分明治十九年か二十年の頃でありましたか、世人がヤレ東洋の運命とか、日本の未来とか種々議論致しました中に、世界列國の行く末と云ふ書が出版とな」ったと回想し、「著者は大方東洋政略上日本の后圖をなすには、朝鮮を略取せねはならぬと云ふ議論を寓したの」だろうが「尤も私はこの議論には不同意で」とあると述べる。

そして芳子は、「今日の如き士民か皆戦争を好む好時節」を嘆き、「折のあるとき、朝鮮を攻め取るが、第一の機略」として事態に介入しようとする保守党勢力を「侵略主義」として批判するのである。

ここでは主人公・芳子が「局外中立」「非侵略主義」の立場から、世論の大勢が「好戦論」「侵略主義」の傾向であるのを危惧し、また『世界列国の行く末』を「侵略主義」的だとして批判していることが分かる。

『寝やの月』の登場人物・武田芳子による「大方東洋政略上日本の后圖をなすには、朝鮮を略取せねはならぬと云ふ議論を寓した」という指摘は、前に見た『国民之友』第八号の「小説及び雑記」の評と重なってくる。このことは、芳子の言葉を借りれば、現実世界の明治二〇年当時の「士民か皆戦

争を好む」傾向、つまりは国権論や対外膨張論を反映ないしは迎合した作品として『世界列国の行く末』が受容されたことを示唆している。

高安の『寝やの月』におけるセルフパロディ的な『世界列国の行く末』への言及には、自著が「侵略主義」と世間に受け取られたことに対するアイロニーが込められているのではないか。<sup>〔註10〕</sup>

以上のような同時代評やセルフパロディを勘案すれば、『世界列国の行く末』の読み直しにあたっては、参国（日本）が戦争で勝利するというプロットを〈語り手〉東洋奇人がどのように語っているか、未来における戦争の物語について〈語り手〉がどのような世界観を提示しているかに注目することが肝要となる。

### Ⅲ 世界観の検討

#### 1 『将来之日本』との共通性

『世界列国の行く末』が公刊された当時、明治一〇年代後半に生じた朝鮮半島での日清間の対立を契機に、自由民権運動の一般的論調は国権拡張論に傾いていた。また共時的にいわれる国権小説が多く発表されることになる。公刊当時には『世界列国の行く末』が国権拡張論を反映した典型として受容されていた節が認められる。現在のところ、この作品を国

権小説として当時の国権拡張論を反映した作品として扱うのが、一般的な文学史における理解であろう。

しかしながら、『世界列国の行く末』読み直しの結論を先に述べれば、〈語り手〉東洋奇人の提示する世界観とは国権拡張論と対置されるべきものである。なお、ここでいう「世界観」とは、「虚構世界を仮想現実化するための具体的な情報〔註11〕の総体」である。

小説『寝やの月』において、『世界列国の行く末』は「侵略主義」として評価されていた。しかしこの『世界列国の行く末』の世界観とは、「侵略主義」というよりは、非侵略主義といふべきものである。より具体的には平民主義、平和主義を主張する徳富蘇峰『将来之日本』（明治一九（1888）年一〇月）を踏まえるものと推測される。同書は徳富蘇峰の事実上の処女作であり、当時ベストセラーとなった。

『将来之日本』での主張とは、次のようにまとめられる。同書はスペンサーの歴史観やマンチェスター自由主義を擁護する視座に基づき、当時の民権派の「国権論武備拡張主義」傾向を批判し、社会進化論的発想から世界の大勢を説く。世界の大勢は、腕力世界から平和世界へ、武備主義から生産主義へ、貴族社会から平民社会へと向かっている。世界の大勢がこのように向かう以上、日本を世界の大勢に従わせ、平和的で平民主義的な生産国家にせねばならない。以上が『将来之日本』の要点となる。

『世界列国の行く末』の世界観について検討しよう。まず、アメリカ共和国とバルチック専制国という二大国家の設定についてである。

〈語り手〉は、共和制をとる自由・民主国家としてのアメリカ共和国を道義的観点からも高く評価している。<sup>〔註12〕</sup>このくんだりから、『将来之日本』で蘇峰が北米合衆国を「平民主義ノ先登者」<sup>〔註13〕</sup>として評価していたことを思い出してよい。つまり、『世界列国の行く末』の世界観においてアメリカ共和国は、民主制と平和主義を本質とする「生産」型社会が最も達成された国家として位置付けられている。

次にバルチック専制国についてである。バルチック専制国は二〇世紀の頃から海外侵略を積極的に展開していた、説明される。政治形態は「君主専断」であり、「中にも自由民権を主張する不平等なきにあらざるも、條例の嚴密、兵士の行き届きたるよりして其志を貫徹事容易ならざりき」という状況とされる。<sup>〔註14〕</sup>

バルチック専制国はアメリカ共和国とは対照的な封建・専制国家である。『将来之日本』によれば、侵略主義は「武備」型社会と結び付く。つまりバルチック専制国とは、『将来之日本』でいうところの「武備」型社会の最も極まった国家としてある。

つまり『世界列国の行く末』での二十六世紀の世界は、武備主義Ⅱ侵略主義と生産主義Ⅱ平和主義の二大勢力が拮抗す

る世界として語られているのである。

それでは、日本の後身である参国（サンアイランド）について確認しよう。〈語り手〉は二十六世紀に参国は平和的で平民主義的な「生産」国家への転換・改良を文化・経済の領域にわたって果たしていたとする。

唯参島國人の大志ある、是區々たる權力を以て自ら甘んずる者にあらず。該國の政治家はよく世界未來の大勢を看破し、因循して東洋の一隅に僻在するの不得策なるを知りしかば、毎に自ら先んじて宇内を掣肘せん者と思へ、或は文學を奨勵し、或は海防を堅固にし、或は武事を講究し、或は貿易を振起し、その他國憲を更正し、民俗を改良する等、一として波國の暴威を減殺し、進んで東半球の霸王とならんと欲するにあらざる事なし。

（高安龜次郎『世界列国の行く末』（金松堂・一八八七、六）  
一七〜一八頁）

引用部分の「世界未來の大勢」の意味するものは、『将来之日本』において主張されていた「武備機関」が社会の原理をなす貴族主義の社会から「生産機関」が原理をなす平民社会への転換という歴史必然論である。「世界の大勢」が平民主義であるならば、ただちに日本の未来は商業国になるべきだと『将来之日本』は断言する。十九世紀の世界の情勢は表

面上は「腕力世界」であるものの、実のところ貿易主義に基づく「平和時代」への転換が必然であるからだ。

『世界列国の行く末』における「語り手」の説明によれば、参国が自存を維持しているのは貿易立国としてある故なのがわかる。『将来之日本』において蘇峰は、日本が「東洋貿易ノ中心<sup>註15</sup>」となる好位置を占めていとも指摘していた。いずれにしる、〈語り手〉の提示する世界観では、参国が琉球、台湾、そして朝鮮半島を領有したのは「因循」から脱却し平民主義に転換した結果として説明される。蘇峰の言葉で言えば「国権論武備拡張主義」の成果ではないのである。一方で「因循」を克服できなかった支国〔「清国」はバルチック専制国の隷属下にあると説明される。

では朝国〔「韓国」〕についてみておこう。参国が「二十世紀の初年日本と支那と大戦争の時、難なく之を撃破して台湾及び朝國等を畧領」してより、朝国の近代化が進められていたと次のように説明される。

朝国は「参島の領地に属してより、政府が貿易を奨励すると文学を振起するとに由りて文運も盛大に趣き、且つ内地雑居の制行われてより既に百年に及ひしかは、之に伴ふて人種の改良」がなされた。「朝國固有の黄色人」は「サイベリアの北端に退去」し、現今の朝国人は「参島人に比すれば稍劣る所もあり去れと、前きの二十世紀前後とは大に異なり、因循不断譎詐に長せし輩にあらず。精神も活潑に骨格亦偉大、

能く業を勉め事に堪ゆる事を得る者」となった。

こうした設定からは、『将来之日本』の次のような末尾の一節を想起することができる。仮に日本が平和主義を採用し商業国へと転換されないならば、「我邦人ヲ海島ニ驅逐シ吾人が故郷ニハアリアン人種ノ赫々タル一大商業国ノ平民社会ヲ見ルニ至<sup>註16</sup>」るであろう。

つまり『世界列国の行く末』の〈語り手〉は、「因循」から脱却し民主・平和主義への「改良」を果たした参国人が、「アリアン人種」に替わって「赫々タル一大商業国ノ平民社会」を朝国に実現させた、と述べているのである。

このように『世界列国の行く末』の世界観は、武備社会から生産社会への歴史を必然と説いた徳富蘇峰『将来之日本』の理論との共通性を持つ。同書で蘇峰は次のような見解を示す。

第十九世紀ノ時代ハ富ガ兵ニ向テ大勝利ヲ得且ツ得ントスルノ時代ナリ。看ヨク欧州将来ノ歴史ニハ必ず彼ノ帝王宰相等ヲシテ狼狽顛倒セシムルノ一大改革アル可シ。而シテ其ノ革命ナルモノハ何ゾヤ。即チ商業主義ガ腕力主義ニ向テ其ノ抗抵ヲ試ミ。而テ連戦連捷終ニ其最後ノ目的ヲ達スルノ一大革命ナルコトヲ。嗟呼同胞人民ヨ。記憶セヨ。我が四隣ノ境遇ハ実ニ此ノ如キノ有様ナルコトヲ。

（現代日本文学大系第2巻『福沢諭吉 中江兆民 徳富蘇峰

三宅雪嶺 岡倉天心 内村鑑三 集』(筑摩書房・一九七二、七)一八七頁)

つまり、『世界列国の行く末』の語られるところの参国(日本)がバルチック専制国(ロシア)に勝利するという二十六世紀の物語は、〈語り手〉が「商業主義」が「腕力主義」を圧倒する「一大革命」として構成し仮想現実化を試みるものとして理解できるのである。

## 2 自然の淘汰

『世界列国の行く末』では、読者にとっての現在、すなわち明治二〇(1887)年の状況について遠い未来である二十六世紀の時点から振り返る、という〈語り〉の形式が取られている。

作品世界内の事実としての二十六世紀の戦争は、結果として帝政バルチック政権が瓦解し、戦後処理として国際秩序の維持を目的とする世界大会議院の設立へと至る。この世界大会議院は各国の代表者により組織され、諸国の連携を図るための国際法を取決め、国際紛争を平和的に解決するという議決・司法機関である。〈語り手〉は明治二〇年以後の歴史(読者にとっては仮構の歴史)の推移を振り返り、次のように意味付ける。

参国との戦争で帝政バルチックが倒れたのは、民権平和主

義が専制侵略主義を打倒する「世界の大勢」において当然の帰結であった。また戦後の世界大会議院の設立は、十九世紀にゴブデンやベンサムなどによって提唱された平和構想の実現であるが、<sup>註1)</sup>これもまた文明社会の進化による必然的な事象なのである。大事なのは「人為の淘汰をなすにあらざして、自然の淘汰を利用するに在る」ことなのであり、参国(日本)が結果的に勝利したのは国家の方針としてこれを見誤らなかつたからだ。

『世界列国の行く末』で提示された〈語り手〉の世界観は、このような歴史認識に基づいている。まず、明治二〇(1887)年の時点においてベンサムなどの平和構想を作品世界に導入している点は注目されてよいだろう。さらに指摘すべきは、「自然の淘汰」への〈語り手〉の態度についてである。〈語り手〉は叙述を通して「世界の大勢」における侵略主義から平和主義への「自然の淘汰」への確信を提示していく。この「社会は進化物」だとして「自然の淘汰」へ依拠する〈語り手〉の一貫した姿勢は、『将来之日本』の「武備主義」から「生産主義」へとという明快な必然史観と通底するものである。そうした一方で、「兩雄並列せず、強者弱者を圧倒するは今日世界の現況」である明治二〇年当時を「大戦国の世」と形容し、日本は「腕力の競争」を制し得る「英雄」を出現させるのかとも問う。

蓋し自ら進んで各國を壓倒するにあらざれば、自ら招きて其れに壓倒せらるゝ者は今日列國の情態なり。其れ因循姑息の策を執り、徒たに一部のみ注目して亦前途の対策を計畫せざるときは、余は其奴隸の悲境に沈淪し、榜莖の苦役に墮落せんことを恐るるなり。嗚呼彪雜急變の時勢に際し、挺身憤起して世界列國を掣肘し發亂反正して宇内萬國の霸王となり、独力以て九千里地方を統御する者抑亦何れの國に在る乎。東洋の一海島果して此英雄男子を出さざるや否や。

(高安亀次郎『世界列國の行く末』(金松堂・一八八七、六) 四三―四四頁)

〈語り手〉の世界観には、平和主義への必然的轉換という「自然の淘汰」への確信と、強國が弱國を侵奪する腕力主義の進行に対する深刻な危機感が表裏一体となっている。

〈語り手〉の認識では、「世界の大勢」に依拠することのみ日本は未来を切り開くことができる。「自然の淘汰」に背反すれば、欧米列強の侵奪を受け日本は植民地となってしまう。〈語り手〉の批判する「因循姑息の策を執り、徒たに一部のみ注目して亦前途の対策を計畫せざる」とは、壬午事變後に盛んとなる國權擴張論を指す。〈語り手〉は國權擴張論が、「人為の淘汰をなす」腕力主義をもって清國・朝鮮における欧米列強の抗争に参入するものとして批判しているのである。〈語り手〉の言う「英雄」の条件とは、その営為が平

和主義への必然的轉換という「自然の淘汰」に帰納するものと説明されなければならないのである。

〈語り手〉東洋奇人は、歴史を俯瞰して平和主義への必然的轉換という「自然の淘汰」を認め、時局においてそうした「世界の大勢」へと導く英雄的個人へとまなざしを向けている。参國(日本)がバルチック專制國(ロシア)・支國(清國)と戦争して勝利を収め、結果大陸に版圖を得るというプロット自体は、明治一〇年代後半から二〇年代にかけて國權擴張論を支持する者の欲求を満たし得る。しかしながら『世界列國の行く末』の〈語り手〉は、このプロットを「自然の淘汰」史觀に拠って意味付けし、そのプロットの担い手たちがいかに「世界の大勢」に依拠するものであったかについて、仮想現実化を試みているのである。

#### IV 結論

『世界列國の行く末』は、公刊当時における國權論の反映とされてきた。しかし作品の世界観に注目すると、自己と國權論を對置する視座のもとに物語が語られていることがわかる。この作品は、単なる反映論には収まらない。

政治小説は、寓意の伝達・説得ではなく、同一の見方・立場の共有が主目的だとの説がある。<sup>註18</sup>まさに『世界列國の行く末』は、とりまく世界の見方そのものを問題とする作品だったのである。世界観の分析から導かれる〈語り手〉の自己表

出とは、「腕力主義」に依拠して欧米列強の抗争に介入せんとする勢力の世界観に対しての、「平和主義」の視座からの批判である。物語に内在する仮構の歴史、仮構の地勢図で〈世界〉を読み替える装置として、高安亀次郎の小説『世界列国の行く末』はある。

註

〔註1〕

日本人による創作の日露未来戦記としては、北海散人『二十世紀戦争予言 日本の花』（明治二十二（1889）年）、村井弦斎『桑之弓』（明治三十一（1898）年）、海軍大尉〇〇生『日魯海戦未来記』・不二山人『愉絶快絶 日露戦争未来記』（共に明治三十三（1900）年）、また東海散士『日露戦争 羽川三郎』（明治三十六（1903）年）といったものがある。『世界列国の行く末』はこれらを先駆けるものとなっている。

〔註2〕

一九〇三年二月に、南支那老驥（馬仰禹）の輯訳によって、『未来戦国志』という題名で上海で出版されている。樽本照男編『新編清末民初小説目録』（清末小説研究会・一九九七、一〇）六六七頁参照。

〔註3〕

高安亀次郎『憲法と国民』（明治二二（1889）年）一七頁には「余は政海の浮萍者なり。曾て罪を得て鋏窓に繋かれ。悲風暗惨たる境遇に座し。起きては功業の中絶して。逆遭の不幸に泣き。寐ては榮古の無常にして壮志も浮世に敵する能はざるを夢み。亦敢えて生を現世に期せず」とある。また同書三三頁には、「余や生来二

十二年。無数の艱難無数の痛苦は風の如く波の如く余が一身に襲い来ると雖も」との記述がある。また、『政海情波 寝やの月』での天外居士なる人物による序文には、「然ども奇人は齡ひ未だ弱冠に過ぎ」との一節がある。

これらの記述に従えば、高安亀次郎は『世界列国の行く末』公刊当時二〇歳であったことになる。つまり、当時二五歳だった徳富蘇峰に近い、若い世代であったようだ。

〔註4〕

柳田泉『政治小説研究』上「明治文学研究第八卷」（春秋社・一六六七、八）四五頁参照。

〔註5〕

横田順彌『明治「空想小説」コレクション』（PHP研究所・一九九五、一二）二〇〇～二二五頁参照。

〔註6〕

坂野潤治『明治デモクラシー』（岩波新書・二〇〇五、三）第四章参照。

〔註7〕

柳田泉「政治小説の一般（二）」（『明治政治小説集2』「明治文学全集6」（筑摩書房・一九六七、八）所収）四四九頁。

〔註8〕

西田谷洋「東海散士『佳人之奇遇』試論」（『自由民権』第一二二号（町田市立自由民権資料館紀要・一九九三、三）所収）八〇九頁参照。

〔註9〕

横田順彌『明治「空想小説」コレクション』二二六頁参照。

〔註10〕

『寝やの月』における『世界列国の行く末』への言及について、

先行する自著が間違いだつたとする著者高安龜次郎の自己否定だと  
みることもできよう。しかしながら『世界列国の行く末』の世界観  
や歴史認識が「平和主義」であることから、このセルフパロディは、  
自作が正反対の評価をされたことへの高安の込めたアイロニーだと  
考えるのが妥当だ。

『政海情波 寝やの月』は、朝鮮半島の緊張が高まる状況下での  
日本国内における局外中立派⇨改進黨と非中立派⇨保守党の抗争を  
めぐる物語である。国民世論の好戦的傾向を追い風に政権の把握を  
企む保守党勢力に対して、平和主義者・武田芳子による抵抗が「語  
り」の中心となる。

この作品は、『世界列国の行く末』で示された平和主義への移行  
という仮構の歴史において、『世界列国の行く末』において語られ  
ていなかった二〇世紀初頭のエピソードという位置付けになる。そ  
の時局において日本国内の世論の動向を「腕力主義」から「平和主  
義」へと転換していく英雄的個人としての武田芳子の営為が語られ  
る構想があったと推測されるが、『政海情波 寝やの月』ではその  
転換に向かうストーリーの導入部で終わっている。高安は『政海情  
波 寝やの月』の続編を予告していたが、現在のところその続編の  
公刊は確認されていない。

〔註11〕

大塚英志『「おたく」の精神史—一九八〇年代論』（講談社現代新  
書・二〇〇四、一）二一八頁。

〔註12〕

『世界列国の行く末』では次のように語られている。

是即ち該國政府が人民の權利を貴重し、地方の自治を養成し、  
人民も之に應じて共同和親、私慾を捨て、公益に就き、道義を  
重んじて幸福を謀る一種特有の美風に由るの故ならん。

〔世界列国の行く末』（金松堂・一八八七、六）一三頁）

〔註13〕

現代日本文學大系第2卷『福沢諭吉 中江兆民 徳富蘇峰 三宅  
雪嶺 岡倉天心 内村鑑三 集』（筑摩書房・一九七二、七）一九  
四頁。

〔註14〕

『世界列国の行く末』では次のように語られている。

去れば此の國の政治は君主專斷とも稱すべく、流石に廣き五  
百万里地方も一人の指呼に是れ従へ、皇帝の言語は則ち全邦の  
法律となり、諸所要害の地に設置せる鎮臺軍營や警察監獄や縣  
廳郡衙等は、皆皇帝か權威を専らにするの機械となり、中にも  
自由民權を主張する不平黨なきにあらざるも、條例の嚴密、兵  
士の行き届きたるよりして其志を貫徹事容易ならざりき。

〔世界列国の行く末』（金松堂・一八八七、六）一六頁）

〔註15〕

現代日本文學大系第2卷『福沢諭吉 中江兆民 徳富蘇峰 三宅  
雪嶺 岡倉天心 内村鑑三 集』（筑摩書房・一九七二、七）一九  
八頁。

〔註16〕

現代日本文學大系第2卷『福沢諭吉 中江兆民 徳富蘇峰 三宅  
雪嶺 岡倉天心 内村鑑三 集』（筑摩書房・一九七二、七）二一  
八頁。

〔註17〕

『世界列国の行く末』では次のように語られている。

蓋し列國會議は決して實際に其効果を得る能はざるべしと批  
論する者あり。成程余輩と雖ども、殺伐の習俗世に纏へ、未開  
の人種社會を構成するに當り、強て行はんとするにあらず。唯

社會の文明に赴くに從へ、人々其公利公益を増進するの念慮起發せば、自らこの種の會議を社會に發すべしと云うにあり。之を要言せば即ち、敢て人為の淘汰をなすにあらずして、自然の淘汰を利用するに在る者なり。

自然の淘汰によりて列國會議なる現象が此社會に芽生すべしの一徴を示さんに、今日世人が萬國公法の必要なるを感じ、又は交戰條規の訂盟すべきを主張し、其他特殊の國に於て、委員を設けて或る出來事を調理せしめ、特に英國の國會議員のゴフテン氏が仲裁訂規を各國に向て議定せんとし、博士トラブレーが熱心此法に由りて歐洲の平和を維持せんと、シルベンサンの輩も世界の文明列國を會同せんとの議論あり。見るべし、文明の進歩世人をして列國會議の必要を感じしめしを。タチバナスプレント其他卓識なる列國の諸英雄が談茲に及ぶ者は、蓋し此自然淘汰を活用せんと欲するに在るならん。

〔『世界列國の行く末』(金松堂・一八八七、六)二二三〜二二四頁)〕

〔註18〕

西田谷洋氏は「語り 寓意 イデオロギー」(翰林書房・二〇〇〇、三)で、自由新聞の寓話の分析を通して、寓意までもが物語言語に示されるその構造から、寓意の伝達・説得でなく、同一の見方・立場の共有が政治小説の目的ではないかという仮説を提示している。また西田谷氏は同書で、政治小説の民権運動における主要享受形態や、テキスト内部の政治理念表現の質・量の検討から、政治小説が自由民権の情念を強化するメディアだと論じている。

※『世界列國の行く末』の引用に当たっては、適宜句読点を追加した。